

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

金の姉妹

【作者名】

ジャオーン

【あらすじ】

物語の始まりは、時の庭園の崩壊から始まります。

基本的な流れは映画版を参考にしていますが、ある程度原作を知っていれば読めるようになっていいると思います。

そしてアリシア・テスタロッサが気合の復活を果たします。

憑依・転生ではありませんがその性格はそれなりに改変されています。

テーマは姉妹愛。

全体的に百合百合しい雰囲気となっています。

またぼろり的な表現も出てきます。

基本的には空白期 A・Sがメインの話となります。

第一話 「始まり」

時の庭園に女性の慟哭が響く。

それは嘗て稀代の科学者だった女性の声。

それは嘗て自らの愛娘をただ愛した女性の声。

それは嘗てただただ普通の母親だった女性の声。

「私は取り戻す。私とアリシアの過去と未来を！ 取り戻すのよ。こんなはずじゃなかった世界の全てを!!」

だけど今はもうその片鱗は何処にも存在しなかった。

そこに居るのはただただ狂気に侵された女性。

愛に狂った嘗ての母親の姿。

その目の先にあるのは現実ではなく。

その声の先にあるのは失った過去のみであった。

「世界は、いつだって……こんなはずじゃないことばかりだよ!!
ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ!! こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ!
だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない!!」

其処に響いたのは若い少年の声。

その声には力があつた。

けれどその声の持ち主にも隠し切れない悲しみがあつた。

それでもその目の先にあるのはいつだって現実で。

その声の先にあるのはいつだって未来の姿だった。

二人の間には大きな明暗が分かれている。

もしもその愛に狂った女性も、もう少し、後ほんの少しだけこの少

年のように現実を見据え未来を夢見ることが出来たのなら。きつとその少年のように悲しみに打ち勝つことも出来たのだろう。けれども、この場においてはもう少年の声はその女性には届きはしなかった。

女性の意識にあるのはたった一人だけ。

ポットの中に浮いている金色の髪を持つ少女。

その少女にのみ彼女は目を向ける。

自らが過去に失った愛の形。

自らが過去に犯した罪の象徴。

自らの命を投げ打ってでもどうしてももう一度会いたった愛娘。

アリシア・テスタロッサのみが今の彼女のプレシア・テスタロッサの全てであった。

そしてこの世界での終焉を迎える為に彼女は杖を振るう。

もう一度過去に戻る為に。

失った愛を取り戻す為に。

「母やろー」

けれども其処に声が響いた。

心から心配をしている声と共に。

彼女の目の先にあるアリシアと同じ顔を持つ少女。

綺麗で流れるような金髪を持つフェイト・テスタロッサ。

何度も挫折そうになり。一度は完全に心が折れそうになりながらも立ち上がった少女。

その声には、確かな力があつた。

自らの母親に拒絶されたという過去があつたとしても。

それでも少女の目には確かに現実とそしてその先にある未来が映し出されていた。

そんな少女が自らの母だと信じるプレシアに声を懸ける。

「消えなさい。もう貴方に用はないわ」

けれどもプレシアはそんな少女に目を向けようとはしなかった。

一度は娘だと思おうとした少女。

何とかしてどうにかして自らの娘だと思つてそしてそれでも目の前の少女を自らの娘だと　アリシアだと思つことは出来なかった。

利き手がアリシアと違った。

魔力資質がアリシアと違った。

そんな違いがプレシアをどうしようもなく苦しめた。

だから彼女は狂った。

狂うしかなかったのだ。

狂気をもって少女と、アリシアと違うフェイトと名付けた少女と相対するしかなかった。

そして本物のアリシアを。

自らが望む本物の愛娘を蘇らせることにのみ考えることにしたのだ。

それでも少女　フェイトは声を出す。

瞳を揺らしながらも、それでも懸命な口調で伝える。

自らの想いを母へと届ける為に。

「貴方に言いたいことがあってきました。私はただの失敗作で偽物なのかもしれない。アリシアになれなかった人形なのかもしれない。居なくなれって言うなら遠くに行きます。だけど生み出してもらってからずっと、今もきつと母さんに笑って欲しい幸せになつてほしいという気持ちだけは本物です。私のフェイト・テストロッサの本当の気持ちです」

精一杯の想いを乗せて。

愛してる母へと。

例え偽物かもしれないけれども思い出の中にある自分に笑ってくれた優しい母へ届けと。

ほんの僅かでも良いから、私の声が母へと届けと念じながら言葉を結ぶ。

「フン……くださらないわ」

「……っ！」

けれどその言葉がプレシアに届くことはなかった。

もう何もかもが遅すぎた。

フェイトの言葉に耳を傾けるにはもうプレシアは狂気に侵され過ぎていたのだ。

「私は向かうのよ。失われた都アルハザードへ。アリシアとの過去を取り戻す為に！」

既に時の庭園はジュエルシードが起こした次元震で崩壊寸前となっている

そして彼女は旅立つ為にその崩れ去る地面に穴をあける為杖を

デバイスを振るう。

現実を捨て過去に向かう為に。

自らの、本物の愛娘を取り戻す為に。

プレシアは、杖を振るおうとした。

そしてその杖が地面へと触れるほんの瞬間にそれは起った。

パリンッ……

何かが割れる音。

いや、正確に言うならばそれはガラスが割れる音だろう。

その音が響いた瞬間その場に居る全ての人間の動きが止まった。母に呼びかけていたフェイト。

プレシアの動きを警戒して自らのデバイスを掲げて居た黒いバリアジャケットを纏ったクロノも。

そしてプレシアも。

この場に居た全ての人間がその動きの全てを静止した。

パリンッ……

そして音はなおも続く。いや、音だけでなく。

実際に生体ポットにヒビが入り。割れていく。

それはアリシアが入っているポット。

アリシアが眠りにについている生体ポットである。

それは止まることなくポットの全てに広がっていく。

そして遂にそこにあったガラスが全て砕け散っていった。

「何が……起きていると言っている……」

掠れる声でプレシアが問い掛ける。

けれどそれに答えられるものは此処には誰一人居なかった。

いや、此処に居るものだけでなく事の推移をサーチャーで見守っていたアースラ乗組員も誰一人声を出すことなくそれを見続けた。

それはあり得ない光景。

決して現実を起こりえない光景だからこそ誰一人動くことが出来なくなつたのだ。

なぜ、ポットにヒビが入つたのか。

なぜ、ガラスが全て砕け散つたのか。

それは決して外部からの圧力によって割れたのではなかった。ならば何が起こつたのか。

答えはたった一つであろう。

「お母さん……」

それはまさに長い長い眠りからアリシア・テストロッサが目覚めたことを意味しているのだから。

アリシアはポットから体を出すとしっかりとした足取りで地面へと立ち。

揺れることのない瞳でプレシアを見つめ。

はつきりとした声で目覚めの挨拶をする。

「あ……あ……ほ……ほんとうに……あ、アリシアなの……？」

プレシアが問いかける。

震える声で、目の前で起きていることがまるで信じられずに。

フラフラと壊れたマリオネットのように手が揺れながらも懸命に手を伸ばそうとする。

けれど、その手がアリシアへと届く前に彼女は一步後ろに下がってしまった。

「あ……アリシア？」

「う……う……いいえ、お母さん。私は貴方の知っているアリシアではないわ。いえ、正確に言えば嘗てはアリシアだったと言えばいいのかしら」

そう呟いたアリシアはしっかりとプレシアを見ながらもその目には先ほどまでになく強い悲しみが浮かんでいた。

「な、何を言っているの阿里シア……貴方はアリシアでしょう!! 私
の愛しいアリシアなのでしょう!!」

プレシアは目の前でアリシアが言っていることが理解できなかった

た。

何が起きているのかなど何一つ分からない。

けれども、それでも、やっと、やっとアリシアが目覚めたのだ。確かにアリシアと会話しているのに。

なのに目の前に居るアリシアはそれを否定する。

「確かに私は嘗てはアリシアだった。いえ今も確かにアリシアだわ。でも、母さんの知っているアリシアと今、母さんの目の前に居る私は別人と言ってもいいわ」

「な、なにをっ!!」

プレシアがなおも叫ぼうとするのを遮りアリシアはさらに言葉を重ねる。

「ねえ母さん。魂ってあると思っっ」

「た、魂？」

「そう魂。もちろん言い方は色々あるわ。ゴースト。幽霊。靈魂。アストラル体……は少し違うわね。まあとにかくそう言った肉体とは別次元にある者のことよ」

「そ、そんなものあるはずないわっ!!」

プレシアはもう何が現実なのかほとんど分からなくなっていた。

それでも懸命にアリシアの問いに答える。

まるでそうしなければ自我がもう保てないかのようじ。

「そう……だよ。ミッド世界における常識では魂という存在は完全に否定されている。生命の生死は肉体活動の有無のみで決められて

いる。でもね……お母さん、魂と言つものは本当にあるんだよ」

そこでアリシアは一度言葉を区切る。

そして母親の瞳としっかりと目を合わせる。

自らが話していることに僅かたりとも嘘偽りがないと訴えるかのよう。

そんな二人のやり取りをアリシアと同じ顔を持つフェイトは信じられずに茫然と見つめる。

一体何が起きているというのか。

彼女はともすればその場から逃げだしそうになるのを懸命に堪えながら目の前の二人を見つめ続ける。

そしてそんな少女を彼女の使い魔であるオレンジの髪を持つアルフが肩を持ち支えている。

「人は死ぬと肉体から魂が離れるの。そして離れた魂は流れ流れて世界を巡り、そして新たな肉体へと宿っていく。そうやってこの世界は廻っているの。でもね、私の魂はそうはならなかった。ヒュードラの事故の時、私の魂は肉体から分離したの。でもね、完全に離れはしなかった。言ってしまうえば魂の片足のみが肉体から抜けなかったようなもの。まあ……正確に言えば肉体からはある程度分離出来たいたから肉体の近くなら少し離れて居ても移動することは出来ていたんだけどね」

「な……なにを……なにを言っているのアリシアっっ!!!」

プレシアが絶叫してアリシアに手を伸ばそうとするが、それでもなおアリシアは淡々と説明を続ける。

「でもね本来はそんなことはありえはしないの。体から離れた魂は流れに乗り世界を巡る。そっいつ風に世界は出来ているわ。けれど私

はそうはならなかった。言ってしまったえば生き霊みたいなものになっていたの。どうしてそうなったのか詳しいことは分からない。けれどそれもこの肉体が滅びれば終わるはずだったの……そうすれば、私の魂も世界の流れに乗るはずだった」

そして一度言葉を止めるとアリシアは左手を胸に添えた。

「けれどこの体が完全に滅びることはなかった。母さんがいつまでもそれを保とうとしたから」

それは決して体が滅びなかったことを言んでいる声色ではなかった。ただ淡々と事実を述べるようにアリシアは話続けた。

「け、けれどっ!! そうだったからアリシアは蘇ることが出来たのでしょう!?! なら何も悪くないじゃない!!!」

プレシアはそう叫ぶように問いかける。

けれど問いかけながらもプレシアの胸には予感があった。

聞いてはいけない。

その答えを聞いてはいけない。

聞けば必ず後悔をする。

どれほどの狂気に侵されていようともその答えを聞けば堪えられなくなる。

だから耳を塞ぎたい。

何も知りたくない。

もう止めてっ! 何も話さないでっ! そう絶叫しようとしたけれど、それよりも早くアリシアが話し始めてしまった。

「始めに言ったでしょう? 私はずてのアリシアではないと……」

アリシアの言葉をそれほどまに彼女にとって耐えられないものであったから。

そして時の庭園には愛に狂った魔女の慟哭と世界が壊れていく音のみが響いた。

けれどその時になって、初めてアリシアは一步プレシアのほうに近づいた。

「ねえお母さん。私の魂は確かに穢れているわ。魂の大部分は確かに化け物、悪魔、悪霊と呼ばれるようなものとなっているわ。詳しいことは分からないけれど……もう一度この体に魂が戻ってこれたとしてもそれは変わらない。体がどれほど人間であろうとも魂はもう……人間ではないわ……でもね……お母さん……！」

そう言うとアリシアは、背伸びをしプレシアの頬を両手ではさみしっかりとその瞳を合わせた。

涙に濡れ、焦点が合っていないかのようなプレシアの瞳を見ながらアリシアは続けた。

「私を蘇らせよとしてくれてありがとう。」

そう優しく微笑みながら言った。

「あ………」

そう言われてプレシアは、ただ呟くことしか出来なかった。

ただ呆然とアリシアの顔を見つめ続ける。

「お母さんが私の体を保っていてくれたおかげで私はもう一度、こうして自分の体を手に入れることが出来た。

それにね確かに私の魂は人間では無いわ。でもね完全に化け物と言っわけでもないの。」

「どうしてなの……？」

アリシアの手の温かみのおかげだろうか。

それとも目の前で見える優しい微笑みのおかげだろうか。

プレシアは僅かに落ち着きを取り戻すことができた。

「あのね、一度は本当に化け物になりそうになったの……お母さんが私のせいで寂しい思いをするのが悲しかった……お母さんが私のせいで悲しい思いをするのが耐えられなかった……お母さんが私のせいで狂気に侵されていくのを見て自分が許せなくなってしまった……そうして、気が付くうちに私はどんどんと化け物になっていてしまったの。世界を呪い、自分を呪い、ただただ穢れを撒き散らす存在になっていった……でもね、そんな私を救ってくれた存在がいたのよ」

「それは……？」

プレシアは再びどうしようもないほどの自責の念に囚われながらも問いかける。

一体何がアリシアを救ってくれたのか。

それを知るために。

「それはね、フヘイトよっ……」

満面の笑みと共にアリシアは答える。

「……えっ……えっ!!」

それまで二人のやり取りをただただ呆然と見つめていたフヘイトは、急に自分の名前が出てきて驚きの声を上げる。

まさか、此処で自分の名前が呼ばれるなど思いもしなかったのだ。

「どうしてなの?」

プレシアは、叫ぶように問いかける。

プレシアにとってフェイトはただアリシアになれなかった偽物だったのだ。

もはやアリシアを蘇らせるために使う駒でしかなかった。

そんなフェイトが何故アリシアの救いになったと言うのか。

その問いに一度フェイトのほうを振り向いてから笑みを浮かべたままアリシアは答える。

「私がお完全に化け物になってしまいそうになってしまった日の夜、私はフェイトの部屋に行ったの。どうしてその日フェイトの部屋に行ったのかは覚えていないわ……けれど、最後に残った僅かな理性で私はフェイトが眠っている部屋に行ったの。それでね……部屋に入った後しばらくの間フェイトの寝顔を見て居ただけけど、あの子ったら急に起きちゃったの。そしてね私が居る方を見つめて来たのよ。魂とは本来生きている人間には決して見えはしないのに。だということに、フェイトったらしっかりとこちらを見つめて嬉しそうに呟くのよ」

アリシアは語る。

プレシアとフェイトを交互に見つめながら。

そしてそんなアリシアを二人はただ黙って見つめ続ける。

「お姉ちゃんって」

とても嬉しそうに最高の笑顔と共にアリシアはそう話す。

「あ……………あ……………」

その答えを聞いてプレシアは遂に耐え切れなくなり再び涙を流し始めた。

そしてそんなプレシアをアリシアは優しく抱きしめる。

「その言葉を聞いてね、私は理解したわ。私がずっと、ずっと欲しかった妹が目の前に居るんだと。そしたらね、急に意識がはつきりとしたの。化け物になりかけて居た私は、その瞬間確かに人の心を取り戻したわ。それでね、私は思ったわ。世界に負けるわけにいかないよ。そして私は決意したわ。化け物になんかなるわけにはいかないよ。だって私は　　この子の姉なんですものってね」

「ううう……ううう……おねえ……ちゃん!!」

アリシアがフェイトのことを語り始めてから涙を流していたフェイトは、遂に耐え切れなくアリシアの元へと駆け出して抱き着いていた。

そして、アリシアに抱き着きながら姉を呼ぶフェイトをアリシアは優しく抱きしめ続けた。

「だから私は、世界に抗ったわ。少しでも魂が穢れていかないように。何度も化け物になりそうになったわ。それでも、私はそれに耐え続けた。決して人の心を忘れないように。だって人の心を無くしてしまつたらフェイトのことを見守れないもの。大切な大切な私の妹を忘れてしまうことなんて出来ないわ。だからね、今までずっとそうやって思ってきたからこうやって今も人の心を無くさずいられたんだと思うわ」

「お姉ちゃんっ！　お姉ちゃんっ!!」

フェイトはぼろぼろと涙を流しながら姉を何度も呼んだ。

そしてそんな妹をアリシアは優しく優しく撫でながら抱きしめ続けた。

フェイトが抱き着いたことで一歩下がって二人のやりとりを見ていたプレシアは、そんな二人のやりとりをただ呆然と見つめていた。アリシアの偽物だと思っていたフェイトがアリシアの救いになっていたなどどうして思えようか。

けれど。

ああ、そういえばとプレシアは思う。

嘗てアリシアとした約束がその時になって思い出された。

それは二人でピクニックに行った日だ。

アリシアにお願いをされたのだ。

『ねえ、ママ… 私ね妹が欲しいの…』

思い返せば間違いだらけの人生であったとプレシアは思う。

アリシアには寂しい思いばかりをさせてしまっていた。

拳句の果てには自らの研究がアリシアを殺してしまった。

そして、アリシアを蘇らせようと思いついた造りあげたフェイトは決してアリシアではなかった。

だから何度も何度も彼女に酷い仕打ちを行ってきた。

少しでも早くアリシアを蘇らせるために。

けれど、その行いはただアリシアを苦しめる結果でしなかったのだ。

そしてそんなアリシアを救ってくれたのがフェイトだと言う。

「（本当に……私は間違いばかりで酷い母親だわ……）」

プレシアは深く深く溜息を吐く。

今までの人生を振り返り、拭いきれぬ後悔を吐き出すかのようだ。

けれど、とも思う。

けれどどれほど間違えばかりであったとしても。

それでも目の前には抱き合って居る二人の姉妹が居る。

それだけはきつと間違いではなかったのかもしれない。

「(本当に都合の良い話だわね……)」

そんな思考と共にプレシアは、もう一度溜息を吐きだす。

そして、今までよりほんの少しだけ憑きものが落ちたような顔で抱き合って居る二人の姉妹へと手を伸ばそうと。

「……………え?」

けれどその手が届くことは永遠になかった。

それはただの偶然か、それとも神の悪戯か。

プレシアが立っていた部分の床が、遂に次元震に耐え切れずに崩れ去ったのだ。

「母ちゃん!!!」

「お、お母さん!!!」

それに気づいたフェイトとアリシアは懸命に手を伸ばそうとする。

けれど二人の手は届くことが無く。

プレシアは、次元の狭間の奥へと無情にも落ちていく。

魔法の使えないこの空間ではもはや助けることなど出来はしない。

そんなことは二人とも既に分かっている。

それでも、それでも届けと。

落ちていく母親にこの手が届けと手を伸ばす。

そして、そんな二人の姉妹をプレシアは落ちてく最後の時間で確か

に見ることが出来た。

懸命にこちらへと手を伸ばし来るアリシアとフェイト。

二人の姿をプレシアは目に焼き付けながら落ちていく。

そんなプレシアの表情は、決して狂気に侵された顔では無くて。とても穏やかな顔をしていた。

「ちよつならアリシア……………フェイト……………」

その最後の眩きと共にプレシアの姿は、次元の狭間に消え去っていった。

「母さんっっ!!!」

フェイトは遂に耐え切れずにプレシアの後を追おうと次元の狭間へと飛びこもつとする。

けれどそんなフェイトをアリシアは両手で支えて引き留める。

「だめよフェイト！ 貴方まで行ってはいけない!!」

「でもお姉ちゃん!! 母さんがっ！ 母さんがっ!!」

「分かっているわ！ お母さんは確かに行ってしまった。出来ることなら追いかけてい！ でもね、ここに飛び込めば間違はなく死ぬわ。私は、そんな場所にフェイトを連れて行くわけには行かないの！ お願いフェイト！ 貴方はまだ生きなくちゃいけないの!! フェイト、後ろを振り返りなさい!!!」

そう言われて、フェイトは後ろを振り返る。

「フェイト!!!」

アルフがこちらへ泣きそうな顔で駆けてくるのが見える。

「フェイト・テストロツサ!!」

クロノ・ハラオウンの呼びかけが聞こえた。
そして。

「フェイトちゃんー!」

「……………なのは」

暗闇から救ってくれた白い魔導師高町なのはが見えた。

本当に心から心配している目で「こちらを見つめているのが分かった。

「分かったでしょう? 貴方のことを心配してくれている人達が居るのよ。そんな人達を無視して貴方は向こうに行こうと言うの?」

「お姉……………ちゃん」

「それになにより。こうして私がこちらの世界に帰ってこれたというのに、貴方が向こうの世界に行ってしまったら私は今度こそ耐えられないわ。だからフェイト……………私をもう一人にしないで」

そう言うとアリシアは一筋だけ涙を流した。

「うん……………」
「うん……………」
「お姉ちゃん」

「うん、良いわ……………さぁ行きましょうフェイト」

そうして最後に涙を拭くとアリシアはフェイトへと手を伸ばした。

フェイトはその伸ばされた手をしっかりと取ると二人はその場から駆け出した。

しっかりと手を結び、決して離れることがないように。

崩れ行く時の庭園の出口を目指し。

光の先へ。

二人の未来に向かって駆けていく。

第二話 「アースラ」

「私をフェイトと同じ部屋にしてください。リンディ艦長」

時の庭園から脱出後一日がたった頃。

場所は、今回のジュエルシードに端を発する事件を担当することになった艦。

時空管理局所属L級次元航行艦船の8番艦アースラ艦長室。

そこで、一人の少女と女性が向かい合っている。

「……貴方も分かっていると思うけれどフェイトさんは、今回の事件に関わる重要参考人よ？ もちらん色々配慮はするけれど、それでも簡単に人に会わせられるわけにはいかないの。それは分かっているわね？」

そうアースラ艦長であるリンディ・ハラウンが問いかける。

見かけ上の年はどうみても二十代であるがこれでも一児の母だ。

そして今回の事件の現場総責任者でもある。

問いかける様子は笑みを浮かべながら優しげではあるけれども、それでも眼には真剣な色が帯びている。

「そんなことは分かっています。けれどリンディ艦長。事件の重要参考人と言うのなら私こそがそうでしょう？ 今回の事件の発端は私にこそあるわ。私が死んでしまったからお母さんはあんな暴挙に出たのだから。だからもしも今回の事件で罪を問うと言うのなら私にこそあるわ。決してフェイトが望んであのようなことをしたわけじゃないのだから」

アリシアもまた真剣な顔でリンディに答える。

今回の事件。

それはユーノ・スクライアが輸送するジュエルシードを積んだ輸送艦がプレシア・テストロッサによって撃墜された所から始まる。

そして撃墜された輸送艦からジュエルシードは解き離れ。

第九十七管理外世界『地球』へと落ちてきた。

そしてその落ちたジュエルシードを回収させるためプレシア・テストロッサは、自らが造りだしたアリシア・テストロッサのクローンであるフェイト・テストロッサにその回収を命じた。

その後フェイトはジュエルシード回収中にユーノや現地協力者である高町なのはとの戦闘等も行われた。

そしてそれから時空管理局の介入が行われ、最後はプレシアの居城である時の庭園での決戦となった。

プレシアはその決戦においてジュエルシードを発動。

自らが失った愛娘であるアリシアの命を取り戻す為に失われた都『アルハザード』へと向かおうとした。

けれどその時になってアリシア・テストロッサは自らの力によって復活を果たすこととなった。

そして、最後はプレシア・テストロッサが自らが起こした次元震により虚数空間に飲み込まれこの事件は終幕となった。

これが今回問題となっている事件の概略となる。

「……………もちろんフェイトさんに責任が無いことは分かっているわ。全ての違法行為は自らの意思では無く、母親に命じて行ったこと。だから今すぐと言う訳にはいかないけれど、必ず彼女は無罪にしてみせるわ。だからそれは心配しないでちょうだい。それになにより、アリシアさん……………」

重要参考人ではあるけれど、罪を負わせるつもりはない。

リンディはしっかり言い聞かせるようにアリシアにそう言うつと一度言葉を区切った。

そしてアリシアの名前を呼びしっかりとその目を見て話し始める。

「貴方こそ罪を感じることは何一つないのよ。貴方はただもう一度この世界に生を受けれたことを喜べ良いの。貴方が背負わなければいけない責任なんてないわ」

そうはつきりとリンディはアリシアに向けて伝えた。

それは時空管理局アースラ艦長としての言葉が。

それとも一児の母としての言葉が。

はたまたその両方か。

「……………ありがとうございますリンディ艦長。そう言ってもらえと少しだけ気持ちになります」

未だ憂いは帯びているけれども、それでも心から「ちらのことを心配してくれているであろうリンディの言葉をアリシアはしっかりと受け取った。

顔にや僅かではあるけれど笑みを浮かべて。

けれどその笑みをすぐに納めアリシアは再び真剣な顔でリンディに向き合う。

「……………けれど先ほどの願い出は撤回しませんよ。もう一度言います。私をフェイトと同じ部屋に入れてください」

もう一度先ほどの言葉を繰り返す。

先ほどよりも強い口調で。

決して聞き届けて貰えるまで引き下がるつもりはないと言う気持ちを含めて。

それを聞いたリンディは再び難しい顔をする。

そしてしばらくの間、リンディとアリシアはお互いの顔を見つめ続けた。

二人とも決して顔をそらさずに。

そしてその睨み合いにも近いを続けた後、先に折れたのはリンディであった。

彼女は一度だけ目を瞑ると溜息を付いた後に言葉を発した。

「……はあ。先ほども言ったけれどアリシアさん。私たちはフェイトさんに罪を着せようだなんて決して思っていないわ。それはこのアースラ乗組員の総意だと思ってもらって構わないわ。けれどね、彼女が今回の事件の容疑者の一人であることに変わりはないの。いくら彼女が自ら望んで行ったわけではないけれど、彼女が実行犯であることはどうしようもない事実。だからこそ、彼女は現在監視の付いている監視部屋に入れられている。こういった部分を疎かにすれば、それこそ裁判の時に面倒になったりすることもあるわ。だから、これはあくまでも裁判の時に彼女の無罪を勝ち取る為にしている処置なのよ。それは分かるわね？」

「ええ、それは分かっています」

問いかけるリンディにアリシアはしっかりと頷きかえす。

「そしてアリシアさん。貴方も確かに重要参考人ではあるけれど貴方は容疑者ではないわ。だから貴方にはこの船の一部ではあるけれど自由に行き来が出来る許可が与えられている。けれどもフェイトさんと同じ部屋に入るとなると貴方も許可なくその部屋から出られなくなるわ。それでも貴方はフェイトさんと同じ部屋になるのね？」

再度確認するよつに。

彼女にしっかりと言い聞かせるよつにリンディはアリシアに問いかける。

「もちろん構いませんよ。その程度のことであの子と同じ部屋になれ

ると言うのならなんの問題もありません。あの子が　フェイトが背負わなければいけないものは全て私も背負います。だってあの子は私の半身　いえ、私の全てなのですから」

そう何の迷いもなくアリシアは言い切る。

それは決して盲信ではなくて。

彼女の目にあるのは確かに正気の色である。

その上でアリシアは言い切るのだ。

自らのことよりも全てのことのでフェイトを優先すると。

「……………はぁ。そこまで言い切るのなら仕方ないわ……………貴方にフェイトさんの部屋への入室を許可するわ。」

場所は分かっているわね？　監視員への連絡は私のほうからしておくからそのまま行けば入ることが出来るわ」

アリシアの言葉を聞いたリンディはもう一度溜息をつくとフェイトの部屋への入室を許可した。

そしてそれを聞いたアリシアは、本当に嬉しそうな顔をする。

それまで話していた顔は、決して子供がする顔ではなく何処までも大人びた顔であったが、その笑みを浮かべた顔はまさに年相応の顔であった。

「ありがとうございますリンディ艦長!!」

そしてそのまま立ち上がると風のように駆けて部屋を出て行ってしまった。

その変わり身にリンディはやや驚いた顔をしたが、すぐに優しげな顔をして彼女が出て行った先を見送った。

そうして、先ほど注いだのは未だ口を付けていなかったお茶へと手を伸ばしそれを飲み干した。

そして彼女がお茶を飲み終えたところに閉まっていた扉が再び開く。

「よろしかったのですか艦長」

入ってきたのは一人の男性　いや、見た目上は少年と言うほうが適切だろう。

アースラ所属の時空管理局執務官クロノ・ハラウンである。

そんな彼が艦長室へとやって来て艦長であるリンディに問いかける。

やや不機嫌そうな声色をして。

「今は二人つきりだから母さんで良いわよ。それでそれは何について聞いているのかしら？」

それに対してリンディは、朗らかにややからかいの成分も含まれているかのような声色で問い返す。

「……アリシア・テストロッサのことですよ。彼女をフェイトと同じ部屋にいてよかったですか？　彼女は今回の事件における重要参考人だけでなくその存在にも未だ多くの謎が残っているんですよ？」

「確かにねえ。生き返るだけでも驚きなのにそれに魂の存在だなんて言われても俄かには信じられないわ。それでも、彼女が話してくれた生前の記憶とこちらが確認した記録は確かに一致している。それは、フェイトさん自身も知らないことが多く含まれていた。だから、彼女がアリシア・テストロッサ若しくはその記憶に完全に受け継いでいるという存在であることは間違いない。そして　何よりも彼女がフェイトさんのことを思っている気持ちは本物だわ。だから、きっと彼女の願い出をここで聞き届けなくても彼女は今度は力尽くでフェイトさんの部屋に行ってしまうかもしれないわ。だったら、先にこちらで

許可を出しておいた方が良いでしょう？」

リンディは何処か気楽そうな感じではあるけれどそう言った元々はフェイトを監視部屋に入れているのも形式上の為だ。

だから先ほどは厳しめに言ったが、それでもこのぐらいのことなら大した問題は無いと思っている。

「けれど母さん……………」

それでも、クロノは未だ何処か渋るような口調で言う。

けれどリンディはそれを遮って言葉を続けた。

極上の笑みと共に。

「それに何よりあんな可愛い子にあれば真剣にお願いされたらダメだなんて言えないわ」

リンディ・ハラオウン。十四歳になる息子を育て上げたが実は女の子の子どもずっと欲しかったと思って居たりもしたとか。

「はあ……………分かりましたよ。監視の方には僕の方から言うておきます」

こんなふうになった母にはもう何を言っても無駄だろうと思ったクロノは、一度溜息を付くと部屋を後にしようとした。

そしてそんなクロノにリンディは最後に言葉をかける。

ちょっと、お使いに行つて来てというふうな口調で。

「あ、そうそう。私あの子たちの保護責任者になろうと思っているの。だからそっちの書類の準備もお願いして良いかしら？」

「……………了解。艦長」

しばしの沈黙の後にクロノは返事をする。

自分に一切の相談が無かったのはどういふことかと問いただそうかと思っただけれど、この人なら仕方ないかと思っただクロノは再び溜息をついて部屋を後にしたのだった。

第三話 「姉妹」

アースラ艦内にある窓の無い一つの小部屋。

其処は他の部屋とは隔離された艦の奥にある。

本来は使われることのないこの部屋には一人の少女がいる。

此度の事件における重要参考人として監視部屋への入室を言い渡されたフェイト・テストロッサ。

そんな少女がこの暗く狭い部屋でたった一人。

ベッドに顔を埋め枕を涙で濡らしている。

「う……………う……………う……………」

必死で声を抑えようとしているけれど、それでも耐え切れずに嗚咽が喉から漏れ出ている。

少女はこの暗い部屋で涙を流し続けていた。

彼女は自分がどうして一人でこの部屋に居なければいけないのかは確かに理解している。

それでも寂しいのだ。

どうしようも無く寂しいのだ。

一人ではどうしても涙が抑えきれないほどに。

「あ……………」

少女は使い魔の名前を呼ぶ。

いつも自分と一緒に居てくれる最愛の使い魔。

自らのことを常に一番に考えてくれる大切な大切な使い魔。

そんな彼女も今は一緒に居ない。

彼女もまた取り調べや監視の為に別の部屋へと連れて行かれる。

「なのはお……………」

少女は自分に光を与えてくれた女の子の名前を呼ぶ。
何度倒してもその度に自らの前に立ち塞がり友達になりと言って
くれた子。

けれどフェイトの心を救ってくれた女の子も今は此処に居ない。
彼女もまた自らの星に、地球に帰っているのだから。

「…………おねえ…………ちゃん…………」

そして少女は最後に姉の名前を呼ぶ。

会ってからまだ一日しかたっていない姉。

死んだと思われて居たのに目の前でその復活を果たした少女。

そして、自分と同じ遺伝子を持つ存在。

フェイトは理解している。

自らは彼女の遺伝子によって作られた存在であるということ。

そして彼女の代わりに生み出された存在であるということ。

複雑な関係。複雑な思いがそこには確かにある。

しかしフェイトは素直に思うことが出来たのだ。

彼女こそが　アリシア・テストロッサこそが自らの姉であると。

そこには理由も理屈も存在しなかった。

ただそう思ったのだ。

触れ合った時間は確かに短いけれども。

それでも彼女は自らの姉なのだ。

そう思ったのだ。

「会いたいよ…………おねえちゃん…………一人は…………寂しいよ…………」

「あら、私は此処に居るわよフェイト」

「えっ!？」

決して帰ってくると思って居なかった眩きに自分のすぐそばから返事が返ってきてフェイトは慌てて起き上がった。

けれど涙を拭う時間は無かったのか未だその目には多くの涙が溜まっていた。

「お、お姉ちゃんー! ど、どつして此処にいるの!？」

そんな妹の様子を見て、アリシアは彼女を抱きしめると優しくその涙を拭ってやった。

「リンディ艦長に頼んだのよ。貴方と同じ部屋にしてくださいって」

フェイトの耳元でアリシアは優しくそう呟く。

「そ、そうなんだ……。でもどつしてそう言ったの?？」

「あら、そんなこと決まっているわ。一人だとフェイトが寂しい思いをすと思うたからよ」

「あう……うう……」

アリシアは優しく微笑みながらそう言ったのだが、フェイトは先ほどの眩きを姉に聞かれたことを理解して顔を赤らめてしまった。

「あ、あのね……一人は確かに寂しいけど、私は大丈夫だよ。一人でもちゃんと」

フェイトは懸命にそう言おうとしたのだけれど、そのよりも前にアリシアが彼女をしっかりと抱きしめてその続きを言わせなかった。

「少し……落ち着いた？」

「うん……「じめんね……」一杯泣いて……」

「そんな」と気にして良いのよ。むしろ妹に泣きついて貰えるなんて姉として「こんなに嬉しう」ことはないわ」

「あ……」

アリシアは、本当に嬉しそうに言っただけだけどフェイトは恥ずかしそうに顔を赤らめた。

それでも抱きしめられている手を払いのけようとは決してしないのだけれど。

そしてそんなフェイトの様子をもう一度嬉しそうに見てからアリシアは、少しだけ真剣な表情をした。

「ねえフェイト。少しだけ私の話を聞いてくれるかしら」

「……うん」

声色と表情から真面目な話だろうと察したフェイトは、彼女もまた真剣な表情でアリシアは見つめ返した。

「まずは……貴方に謝罪しなければいけないわね……本当に……「じめんなさい」

「……えっ」

それはあまりに唐突な謝罪であった。

真剣な声色で。

そしてとても悲しげな表情でアリシアはフェイトに謝罪を行った。

「お母さんがあんな風になってしまったのは全部私のせいだわ……。私の存在がお母さんを苦しめてしまった……。私の存在がお母さんにどうしようもないほどの呪縛を与えてしまった……。だから……。だから……。私のせいでフェイトにも沢山苦しい思いをさせてしまった。本当に……。本当に……。ごめんなさい……。フェイト……。」

最後のほうは涙交じりになってしまった懺悔の声。

自分という存在のせいで家族を苦しめてしまったという思い。

そんな思いがずっとアリシアを苦しめ続けて居たのだ。

魂であった時から。

そしてこの肉体を再び得てからも。

だから、彼女はどうしてもフェイトに謝りたかったのだ。

そんな謝罪をしてもきっと逆にフェイトを傷つけるだけかもしれないけれど。

それでもアリシアはその謝罪を口にせずにはいられなかったのだ。

「ちがっ！ 違うよお姉ちゃん！ お姉ちゃんは何も……。悪くない。悪くなんか……。ないよお。だから……。泣かないで……。泣かないでお姉ちゃん……。」

そして慰めようとしたフェイトもまた再び涙を流してしまった。

先ほど全て流し尽したと思ったのにまたその目には幾つもの涙があふれ出ていた。

「ありがとう……。フェイト。それとごめんね。貴方を支えるなんて言っただのに私の方が泣き出しちゃったして。」

「うっん大丈夫だよ。私もお姉ちゃんと一緒でお姉ちゃんのこと支えたいと思ってるから。」

「そう……ありがとうフェイト」

涙で濡れながらもしっかりとした意志をのせてアリシアを見つめるフェイトをアリシアは嬉しそうに抱きしめる。

そして、お互いが落ちつまで抱き合った後にアリシアは再び口を開いた。

「それでもお母さんが貴方に酷いことを言った過去は消えない。確かにお母さんは貴方に許されざるほどのことを言ってしまった」

「……………うん」

そしてアリシアは話の続きを始めた。

アリシアは出来るだけ淡々と話すように心がけたのだが、それでもフェイトは改めてそう言われて色々なことが思い出されてしまった。

まさにフラッシュバックの如くプレシアに言われた言葉が脳裏に響いてきたのだった。

『貴方はアリシアの出来損ない』

『貴方はアリシアの偽物』

『貴方は何もできないお人形』

「……………うん」

そして思い出せば思い出すほどその言葉はフェイトの中へと浸透してくる。

どろどろしよつもなく手が震え。

体中から冷たい汗が止まらない。

フェイトは心が……とどんと冷え来るのが分かったのだった。

「わ……たし……は……」

フェイトは擦れるように声をだす。

そして目の焦点がぶれそうになったとき急にフェイトは顔を両手で挟まれて上を向かされた。

「こちらを見なさいフェイト！ 確かにお母さんの言った言葉は消えないわ……でもね、私はその言葉をこの場で全て否定するわ」

「否定……？」

アリシアの言葉におつむ返しのようにフェイトは聞き返した。

「ええ否定するわ。いいフェイト、貴方は決して私の代わりなんかではない。何も出来ないお人形なんかでは決してない。ううん、フェイト貴方はね私なんかよりもずっとずっと素晴らしい人間なのよ。だって、貴方は私なんかよりもずっと強いわ。私はねずっと貴方のことを見て居たのよ。フェイトが必死で頑張ってきたのも。どれだけお母さんに酷いことをされようよも、それでもお母さんのことを心から心配していた優しい心を持っていたのも。貴方の行いも、貴方の想いも全て見ていたわ。だからね、そんな私が貴方に伝えわ………貴方は誰よりも立派な人間よ。フェイト」

「お姉ちゃん……」

アリシアは懸命に言葉にする。

少しでもフェイトに言葉が届くようにと。

優しく言い聞かせるよ。

一言一言しっかりと言葉にするのだった。

そして気が付けばフェイトの手の震えは止まっていた。
冷えていた心にも温かさが戻っていた。

まるでアリシアの手から感じる温もりが全身に行きわたるかのよう。
うん。

彼女言った言葉が胸に温もりを点すかのようじ。

「そして何よりも貴方は私のことを本当に救ってくれたのよ……………
ねえフェイト。私が貴方という存在にどれほど救われたか貴方には
分からないでしょう？ 絶望の淵に立っていた私が貴方に姉と呼ば
れてどれほど嬉しかったか。どれほど感謝の言葉を言っても足りな
いほどのなのよ？ だからね、フェイト」

そこでアリシアは一度息を吐きフェイトをみつめる。

しっかりとフェイトの瞳をみつめてそして、心からの笑みを浮かべ
て彼女に自らの言葉を伝えるのだった。

「生まれてきてくれてありがとう、フェイト」

それはフェイトの存在を全て肯定する言葉。

その誕生を心から喜ぶ祝福の言葉。

込められる最大限の慈愛の心を込めて。

アリシアはそうフェイトに伝えたのだった。

ずっと伝えたかったのだ。

彼女に姉と呼ばれた時から。

ずっとずっと彼女に感謝の言葉を伝えたかった。

そしてやっとそれを果たすことが出来たのだ。

母の代わりに、アリシア・テスタロッサは姉として妹が生まれ来て
くれて本当に嬉しいとそう伝えることが出来たのだった。

「その……言葉は……ずるいよ……おねえちゃん。私……嬉しすぎて
……涙……止まらないよ」

フェイトはぼろぼろと涙を流しながらも、それでも顔には笑みを浮かべてそう伝える。

そしてアリシアもまた目に涙を浮かべながら妹を見つめ返す。

「フェイトは私の妹よ。私の誇りで私の幸せ。貴方は私の全てだわ。ねえ……フェイト。これからも貴方は私のことを姉と呼んでくれるからしらっ？」

その姉の問いかけにフェイトは迷うことなく即答をした。

「もちろんっ！ もちろんだよお姉ちゃん!!」

「ありがとうフェイト。ああ、愛しているわフェイト。この広い次元世界の誰よりも貴方のことを愛している」

「わたしもっ……私も大好きだよお姉ちゃん！」

「ええ。ありがとうフェイト」

その日。

二人の姉妹は一つでベッドで抱き合って眠りついた。

そしてその寝顔は。

二人とも心から幸せそうであったのだった。

第四話 「目覚め」

「ん……う……ん……」

うす暗がりの中フェイトは未だ微睡の中に居た。

普段のフェイトは寝起きが良く一度目が覚めればすぐに起きだすのだが、今日はどうしてもそうはならなかった。

覚えてはいないけれどあまりにも気持ちの良い夢を見たような気がしたから。

最近では眠ると悪夢ばかりを見ていたから。

昨日も嫌な夢を見た。

目が覚めたらみんなが自分のことを嫌ってしまっている夢だった。

自分のことを役立たずだと罵られている途中で目が覚めたのを覚えてる。

けれども、今日は久しぶりに熟睡をした。

どうしてこれほどまでに安心を覚えられるのだろうか。

それは先ほどから感じる温もりのおかげだろうか。

この温もりが自分に安心を与えてくれるのだろうか。

そんな思いと共にフェイトは再び微睡の中へと入っていきこうとした。

「あら……やっと起きたのかしらお寝坊さん」

「……………えっ？」

けれどその時になって自分のすぐそばから声がした。

とても優しいげに、けれど何処かからかいの混じった声で。

「お……………姉ちゃん？」

フェイトはまだ寝ぼけ眼であるのかトロンとした声で声のした方を振り向くと。

そこにいるであろう人物を確かめるかのように声を出した。まるでこれが夢か現実か確かめるかのように。

「ええそうよ。おはようフェイト」

そしてその相手は、しっかりとした声で返事をした。これが現実であるとフェイトに確かに伝えるように。

その声を聴いてフェイトはやっと意識が覚醒した。

そして此処が何処で自分がどういった体勢に居るのかを理解すると体を跳ね起こした。

「……………!!? どんどんどんとしてお姉ちゃんが私のベッドに居るの!?!」

「あら………… 昨晚一緒に横になったのをもう忘れてしまったのかしら? それとも………… お姉ちゃんと一緒に寝るのは嫌だった?」

フェイトが心臓をドキマギさせて顔を赤らめながら必死に喋っているのに対してアリシアは着崩れた寝間着を直しながら、落ちついた様子でフェイトにからかいの言葉を懸ける。

けれどアリシアは十分にからかいの声色なのだが、フェイトは慌ててそれを否定する。

目には少しばかりだが、涙を浮かべながら。

「ちがっ、ちがうよっ! ちょっと寝ぼけてただけだから! お姉ちゃんと一緒に寝るの嫌じゃないよ!!」

そしてそれをアリシアは眩しそうに嬉しげな顔で見た後にフェイ

トを抱きしめる。

「もうっ……冗談に決まっているでしょう。このぐらいで泣かないで頂戴」

優しく髪を撫でながらアリシアはそう言い聞かせる。

そしてフェイトもそれで落ち着きを取り戻したのか大人しくアリシアの胸に顔をうずめる。

「ごめんなさい……でも……お姉ちゃんに嫌われたらっと思ってたら……」

「……もう。バカな子ねフェイト。私が貴方を嫌うことなんて絶対ないわ。どんな時だろうと貴方のことを愛しているのだから。お姉ちゃんを信じなさい」

心から愛おしくて愛おしくてたまらない。

それが本当に分かるような声でアリシアはフェイトに伝える。

そしてフェイトにもそれは伝わったのかやっとな安心したような顔をする。

「うん……ありがとうお姉ちゃん」

「あら貴方がお礼を言うことなんて何も無いのよ。それにね、私の方こそお礼を言わなくちゃいけないわ」

「……………え？」

フェイトは何故自分がお礼を言われるのか分からずに子首かしげてアリシアを見つめ返した。

「あのね、貴方の寝顔が凄く可愛くてずっと眺めていたのよ。そして朝から凄く幸せな気持ちになれちゃった！ だから、ありがとね！
フェイト」

そう言ってアリシアは満面の笑みを浮かべた。

そしてそれを聞いたフェイトはボボンと音が出るのではという勢いで顔を赤らめると。

「……………>」

そのまま謎の鳴き声と共にベットにつっぷしてしまった。

そもそも抱きしめられて愛してる等と言われる時点でフェイトの羞恥心メーターは振り切っていたのだ。

その上であればどの幸せそうな顔で恥ずかしいことを言われれば簡単にフェイトの心も限界を迎えると言っつものだ。

そしてそのままつっぷしてしまったフェイトの頭をしばらくの間アリシアは撫で続けていた。

フェイトまたうつ伏せのままながら、その手を払いのけることもなくなされるがままとなっていた。

そうして、しばらくの間穏やかな時間が流れた後にアリシアは撫でる手を止めるとフェイトを抱き起した。

「さて、そろそろ起きましょつかフェイト。本当はもうしばらくこうして居たいのだけれど、もう少ししたらリンディ艦長かクロノ執務官がこの部屋へやってくるはずだわ」

「そっだね。お姉ちゃん」

そうして二人は寝間着を脱ぐとアースラから与えられた服へと着替えたり、寝癖がついた髪を整えたりした。

二人とも未だ化粧をするような年齢ではないので朝の準備と言っ

てもそれほど時間をかけずに終えてしまった。

なので二人ともベッドへ再び腰かけるとこれからのことについて話をすることにした。

「今日は、これから事情聴取の続きなんだっけ？」

「ええそうね。昨日は事件を終えてからすぐだったから簡易的なもので終わったからね。今日はより詳しく話すことになると思うわ」

フェイトの問いかけにアリシアが答える。

するとフェイトは少しだけ顔俯けてしまった。

「……………どっししたのフェイト？」

そんなフェイトの様子にアリシアは心配げな顔をして問いかけた。

「うん……………なら今日は母さんのことについても詳しく話さなくちゃいけないのかなって思ってた」

その問いかけにやや躊躇いがちなながらフェイトはそう言った。

そしてそれを聞いたアリシアは優しく肩を抱いてやりながらフェイトに声をかけた。

「大丈夫よ…………フェイト。事情聴取は私と一緒に行われるはずだから。どんなに貴方が辛くても私が支えて上げるから。だから……………ね？ 安心してフェイト」

「うん……………」

フェイトにとって未だ母とのやりとりは完全に拭い去ることの出来ない傷となっている。

だからそのやりとりを詳しく聞かれるのは怖い。
それを話すのはやっぱり怖いと思う。

けれど、昨晚の姉の言葉。

そして今もこうやって隣に居て自分に安心を与えてくれる姉の腕。
それがあれば自分はきつと大丈夫。

そう言い聞かせてフェイトは俯いていた顔を再び上げることにした。

そうして横を見てみれば、そこには変わらぬ顔がそこにある。
出会ってからまだ二日しか経っていないけれど。

それでも自分に絶対の安心とそして温もりを与えてくれる存在。

そんな姉が隣に居てくれると思うと先ほどまでであったフェイトの
中であつた暗い気持ちはいつの間にかだいぶ薄れてしまっていた。

「それにねフェイト。私もフェイトとお母さんのことをずっと見守つてきていたのだから。だからあそこで何があつたのかは全部しているわ。だからね、フェイトが言いづらいことは代わりに全部私が言つてあげるね」

「うん……ありがとう。お姉ちゃん」

「いいえー。可愛い妹の為なら当然ですよ」

そう言つて笑つてくれる姉の姿がフェイトにはどうしようもないほど眩しくて頼りがいのある姿に映っていた。

もはや、全幅の信頼を寄せてしまつたほど。

そうしてフェイトがアリシアの顔にしばらく見惚れているとフェイトはふと思つた。

「そういえば……お姉ちゃんって今いくつなの？」

肉体的な面で見ればアリシアの年齢は五歳ととなっている。

なので今年で九歳となったフェイトはアリシアよりも見た目上は成長していたりする。

けれどフェイトにとってアリシアが姉だということは決して変わらぬ事実であった。

アリシアは確かに見た目的には子供だ。

けれどそこから滲み出る雰囲気や普段の口調や行いは決して子供のそれでないのは明確だった。

なのでフェイトから見たらアリシアは自分よりもずっと大人に見えていたのでこの問いであった。

「そうねえ……それは難しい質問ね。それは肉体的な年齢ではなくて魂とか精神的な意味での年齢を聞いているのよね？」

「ひん」

「うーん……確かに私の精神的な年齢は、この肉体の年齢より上だわ。魂になってからも意識があつたから精神的な意味では成長していると言って良い。けれど、今が幾つかと聞かれると何と答えれば良いのか迷うわね」

「まじっかっ」

アリシアの言葉にフェイトは首をかしげながら問いかける。

「魂と呼ばれる状態になって居たころの時の流れと、肉体を宿しているころの時の流れは同価値ではないからね。だから精神的に今が幾つかって聞かれたら年齢不詳としか言いようがないわ」

「へえ……」

そんなアリシアの言葉にフェイトはただただ相槌を打つことしかできなかった。

「上手く説明出来なくてごめんね？」

「う、うっん！ 私こそきちんと理解出来なくてごめんなさい……」

そしてそんなフェイトの様子を見てアリシアが謝罪するとフェイトは慌てて首を振った。

「それは仕方ないわ。魂と一言で言っているけれど本来はもっと概念的な存在だからね。だけど、これをきちんと説明できる言葉はたぶん無いわ。だって、一度魂となった存在が再び肉体を得るなんて本来はあり得ないからね。だから魂の存在も確認されていないからね」

「そうなんだ……お姉ちゃんってやっぱりそれだけ凄い存在だったんだね」

そうしてアリシアの言葉を聞いたフェイトは尊敬のまなざしを姉へと向ける。

自分の姉がどれほど凄い存在なのかを再認識するかのようじ。

そして、そんな妹の様子を見ながらアリシアは苦笑をしながら妹の髪を撫で続けた。

そうしてちょうどお互いが沈黙を迎えた頃部屋の扉からノックをする音が聞こえてきた。

「アリシアさん、フェイトさん入って良いかしら？」

「ユンギョー」

それはリンディ艦長の声でありアリシアがそれに答えた。

そうして入ってきたリンディは二人で肩を並べてベッドに座っている姉妹を見ると笑みを浮かべながら挨拶をしてきた。

「二人ともおはよう。昨晩はよく眠れたかしら？」

「はい」

「ええ、良く眠れました」

その二人の答えにリンディは頷きを返すと少しだけ真面目な表情で言葉を続けた。

「そう、それは良かったわ。それじゃあ……早速で悪いんだけど事情聴取の続きをするから私の部屋に来てもらっても良いかしら？」

そうしてその問いかけに頷きを返すと三人はその部屋を後にしたのだった。

第五話 「話し合い」

アリシアとフェイトの此度の事件における事情聴取はアースラ艦内の一室で行われた。

そこではアースラ艦長リンディと執務官であるクノロそして執務官補佐であるエイミィが主となり行った。

事件の主な流れ。

第九十七管理外世界『地球』で行われた戦闘内容。

プレシアがフェイトに命じた内容。

そう言った内容をフェイトとアリシアに聞き取ってアースラが所有する記録と齟齬がないかなどを確かめた。

フェイトはややたどたどしいながらも覚えている内容を懸命に話した。

話がプレシアとのことについて及んだ時は少し体を強張らせたけれども、その度に隣に座っていたアリシアがフェイトの手を握り落ちて着かせ随時フェローを行った。

そのおかげでフェイトは母であるプレシアとのことについても覚えていく内容を話すことが出来た。

よって事件の事情聴取も順調に行われ結果最初に想定していたよりも短い時間で終えることが出来た。

そうして一度休憩を挟んだ後に今度は話はアリシア・テストロッサのことについてとなった。

「それでね、アリシアさん。貴方の体のことについてなんだけど」

何枚かの資料を捲りながらリンディがアリシアに向けて話しかける。

「はい……」

事件の調書の時は落ちついた様子であったアリシアも自身の体のことに話題が言ったときは流石に顔から不安の色を取ることが出来なかった、隣に居るフェイトのほづが心配そうな顔でアリシアのほうを見つめていた。

「身体検査の結果……貴方の体には一切異常はないそうよ」

けれどリンディは拍子抜けするような勢いでそれだけを言ったのだった。

それを聞いてフェイトは心配そうな顔を一転嬉しそうな顔をしてアリシアを見つめるのだけれど、そのアイシア自身は安心したというよりも驚愕している顔でリンディを見つめ返した。

「お姉ちゃん……？」

「アリシアさん……どうしたの？」

そしてそんな様子のアリシアをフェイトとリンディが心配そうな顔でアリシアの名前をよぶ。

「あ……いえ……その……この体に一切異常が無いと言うことに驚いたというか、異常が無いと言ったことが異常な気がしたと言っ……きつと体のどこかには問題がでるのではと思っていたので」

アリシアはやや言いずらそうに二人から顔をそむけながらそう言った。

正直に言えばアリシアは自身は体の何処かに必ず以上が出ると思っ居た。

そもそも即死級のケガを負って魂と肉体が分離したのだ。

いくら母の手によって見た目上は綺麗な形を保っていたと言え。

魂が再びこの体に戻ったことで蘇ったとは言え、体の何処かには必ず異常が出ると思っていた。

いや……最悪の場合は余命数日という結果さえ出るかもしれないという不安もあったのだ。

だからアリシアは一切の以上が無いという結果に驚きを隠し切れなかった。

「そうねえ……確かに貴方の体と貴方自身に何が起きているのかは私たちも全て把握しているわけではないわ。そして貴方自身も何が起きているのかは分かって居ないのでしょう？ だからそのことについて不安を覚えるのは当然だわ……でもね、アリシアさん　今は貴方の体に異常が無いことを素直に喜びなさい。貴方の体は確かに健康で今もしっかり其処に生きているのだから。それは確かな真実なのですよ」

リンディはゆっくりと言い聞かせるようにアリシアにそう伝える。アリシアの態度を見て初めて彼女が不安を覚えていると言うことに気が付いた。

子供とは決して見えない態度でフェイトのことを慰め支えているアリシアを見てついそのことを失念していたのだ。

だから少しでもアリシアの不安を取り除けるように。しっかりとそれでいて優しくアリシアに話しかけたのだった。

「そう……ですね……必要以上に不安に思っただけでも仕方のないことですね。今は自分が生きているという事実を素直に受け取ることにしたほうが確かに良さそうですね……」

そしてアリシアもリンディの言葉を受け、現状を受けいれるように呟いた。

その顔は先ほどまでの不安を覚えている顔ではなくて普段通りの柔かい表情をしているアリシアであった。

そしてそんなアリシアの様子を見てリンディも自身の言葉が受け入れたのに安心を覚えた。

「そうですね。それにも少しでも不安を覚えたことがあったのならいつでも私に言ってきたさい。少しでも貴方が安心を覚えられるよう相談に乗るわ。そうでないとねアリシアさん」

そこで一度リンディは目線を先ほどから一言も話さず姉の姿を見つめ続けているフェイトに向けてから続きを話す。

「貴方が不安のそんな顔をしていると隣にいるフェイトさんが泣いてしまつわよ？」

「え……？ あ……」

そう言われて初めてアリシアは顔をリンディからフェイトに向ける。

そしてフェイトがこちらを不安そうな顔で見つめているのに気が付いたのだった。

その顔にはまだ涙は浮かんでいないけれど今にも泣きだしてしまいそんな雰囲気ではフェイトはアリシアを見つめ続けていた。

そんなフェイトの表情を見たアリシアは慌ててフェイトを抱きしめながら謝罪の言葉を口にするのだった。

「ごめんねフェイト。私のせいで不安な思いをさせてしまった」

「ううん……大丈夫だよ……でも……ねお姉ちゃんの体に異常があるかもなんて全然考えもしなかったの。だからね……もしかしたらどこかに異常があったのかもしれないなんて言われて……急に怖くなったの……お姉ちゃんがね……母さんみたいだね……また……居なくなっちゃうかもしれないって思ったら……私……わたし……」

うっ……うっ……おねえちゃんっ……おねえ……ちゃんっ……」

始めは何とか普通に話そうとしていたのだけれど、話すうちにどんどんと涙声となり遂にフェイトは涙を抑えることが出来なくなり泣き声を出してしまった。

話すうちにどんどんと姉がいなくなるかもしれないと言う恐怖が強くなり遂には母親が目の前で虚数空間へと落ちて行った瞬間まで思い出されてしまい軽いパニック状態となってしまうのだ。

「大丈夫。大丈夫だよフェイト。私は何処かに行ったりしない。ずっと貴方のそばに居るわ。だから安心してフェイト」

そしてそんな妹をアリシアはしっかりと抱きしめて少しでも安心させるように声をかえる。

「うん……うんっ……おねえちゃん……何処かに行っちゃいやだよ……ずっと……お姉ちゃんと一緒に居たいよ」

「ええずっと貴方と一緒に居るわ。離れたりなんかしない。約束するわフェイト」

泣き続けるフェイトにアリシアは何度も何度も話しかける。

ずっとそばに居ると。

離れたりしないと約束する。

フェイトが少しでも安心できるよつにと。

そしてそれはアリシア自身の願いでもあるのだから。

そんな姉妹のやり取りをフェイトが落ち着くまでリンディとクロノとエイミィは見守ったのだった。

そしてそれから数分が経ちやっとなフェイトが泣き止んで落ち着きを取り戻したので二人の姉妹はお互いの席に戻ったのだった。

それでも手だけは繋いだままだったのだが。

「落ち着いたかしらフェイトさん？」

そしてそんな様子の二人に確かめるようにリンディが問い掛ける。

「はい……ごめんなさい。リンディ艦長」

「あら……何も悪いことはないのよ。泣けるときに泣いておくのも大切なことよ」

申し訳なさそうに謝るフェイトにリンディは優しく言い聞かせることでフェイトも恥ずかしそうにはするけれど素直に頷くのがあった。

そしてちょうど話が一段落ついたので見計らってそれまでリンディの後ろに控えていたクロノがフェイトに声をかけた。

「フェイト。アースラはこれから君の裁判のために时空管理局本局があるグレナガンに向かうことになる。そうするとしばらくは此処の地球に来れなくなるだろう。だから、その前に一度君が地球に行ける許可を出せるようにするつもりだ。おそらくは三日後ぐらいになるだろうが大丈夫か？」

「あ……！ うん！ 大丈夫だよ。ありがとうクロノ」

そしてそれを聞いたフェイトはすぐに嬉しそうな顔をした。

地球にはフェイトがもう一度会いたい少女がいるのだ。

そして彼女に会ってフェイトは言いたいのだ。

あの子の友達になりたいと。

それをどうしてもフェイトは言いたいのだった。

だから、クロノからまたもう一度地球に、なのはのところにに行く

と聞けてフェイトは素直に喜んだ。

けれどその隣でアリシアはやや驚いた顔をしてクロノを見ていた。そしてそれにクロノが気が付きアリシアに問いかける。

「どうした？」

「あ……いえ……その、執務管ってもっと厳格な方ばかりだと思っていたのでそういった配慮をして貰えるなんて思っていなかったのだから」

問われたアリシアは、初めは誤魔化そうかと思いい言葉をつまらせたのだが結局はそう素直に思っていることを言ったのだった。

そしてそれを聞いたクロノはやや慚然とした顔をした。

「確かに……僕たちは法の番人だ。守るべきところは守る。けれども何も全てを杓子定規にしようとは思っていない。特に今回のフェイトのことに關しては僕にだって思うところはある。だから僕に出来ることはするつもりだよ」

そうはつきりとクロノは言う。

ちなみにクロノは彼なりにフェイトのことをかなり気遣っていたのだ。

事件の調書作りや裁判に關する根回しなどをリンディに言われることなく精力的に行っている。

そしてそれは全てフェイトの為である。

勿論それは彼なりの正義に基づいてではあるのだが。

それでもクロノがフェイトのことを凄く気遣っているのは事実である。

そしてそれを言葉の端に感じ取ったアリシアは一度驚いたような顔をした後にクロノに向け笑みを浮かべてお礼を言うのだった。

「そう……ですか……。フェイトの為に色々くださってありがとうございます」

「ごぞいます。優しいんですね……クロノさんは」

それは見るものが見惚れる笑顔だ。

まさに美少女と言って構わないアリシアが心から浮かべる笑顔。

それを真正面からクロノは受けてしまった。

慌てて顔をそらしたけれど、耳まで赤面するのは止められない。

本人は必至で無然として顔を浮かべようとしていたけれどそれを横から見守っていたリンディとエイミィに笑われることとなってしまった。

第六話 「地球」

場所は第九十七管理外世界『地球』

そこでフェイト・テストロツサと高町なのは。

二人の少女が涙を流しながら抱き合っ居る。

そしてそんな少女たちを見守る人間が四人。

アリシア・テストロツサとクロノ・ハラウンそしてアルフとユー

ノ・スクライアである。

四人とも涙を流しながら抱き合う二人を眩しそうにみているのだった。

「なのはねえ……本当に良い子だよ。あの子のお蔭でフェイトは救われたんだ……あの子は本当にフェイトの友達だよ」

そして遂に涙を流している一人に感化されてしまったのかアルフまで泣き出してしまい、それをユーノが慰めている。

そんなアルフを見てアリシアもしみじみと呟くのだった。

「本当にね。フェイトなのはみたいなきと友達になれて本当に良かったわ。あの子も私のように友達が出来ないままじゃないかって心配していたのよ」

「ん……君には友達が居なかったのか？」

アリシアの呟きが聞こえたクロノがそう問いかけた。

「ええ……友達と言えるのは当時山猫だったリンスくらいだったわ」

「それは……」

そんなアリシアの答えにクロノは憐憫とも同情ともつかぬ表情をしながら言葉に詰まるのだった。

そしてそんなクロノの様子を見てアリシアは苦笑を浮かべながら言葉を付け加える。

「母の仕事の関係であるところは周りに友達になれそうな子が誰も居なかったから仕方なかったのよ」

そう何でもないかのように言うアリシアである。

けれどそれを聞いて少し恥ずかしげではあるけれど声をかける者がいた。

「な……ならさっ！ わ、私がアリシアの友達になってあげようか？」

それは意外にもアルフであり、そう言われたアリシア自身も突然の申し入れに驚いた顔をした。

「……あら……貴方からそんな風に言われるなんて思わなかったわ。

……貴方は……その……私を嫌っていると思っていたから」

アリシアは言いずらそうにそう話す。

正直に言えばアリシアはフェイトの使い魔であるアルフには嫌われていると思っていたのだった。

フェイトは決して言わないが、それでもフェイトが母から虐められる原因となったのはアリシアは自分自身だと思っている。

だからフェイト自身はアリシアのことを姉だと慕ってくれても、フェイトのことを一番に考え続けている使い魔アルフには嫌われているだろうと思っていたのだった。

なのでアルフのほうからこのようなことを言われるなど本当に思っていなかったのだ。

「そりゃあの鬼婆の話をも初めて聞いたときは、あんたにも嫌な感情を持つちまったさ。でもこの前から散々お姉ちゃんがいかに優しいか。一緒に居られてどれだけ嬉しいかって言うのを散々フェイトから聞かされたらそんな気持ちもなくなるよ。それに……あんたを見て居たら分かるよ。あんたがどれだけフェイトのことが好きなのかって言うのが私のも伝わってきたのさ。だから……そんなあんたとは友達になれたらって思うよ」

アルフはやや恥ずかしがりながらも、けれどはつきりとそう言うのだった。

そしてアルフにそう言われたアリシアは一度驚いた顔をした後に嬉しそうに右手を差し出すのであった。

「貴方にそう言われるなんて本当に嬉しいわ。こちらこそ是非貴方と友達になりたいの。これからよろしね。アルフ」

「ああ。こっちはよろしね」

そうしてアルフとアリシアは二人とも笑顔で握手をするのであった。

そして手を離れた後も嬉しそうな顔をアリシアにクロノは声をかけた。

「良かったな。アリシア」

「ええ。これで私にも一人友達が出来たわ……………これでクロノより一歩リードね」

クロノに声をかけられアリシアは嬉しそうに声を返した。初めだけわ。後半はからかいの声であったのだが。

実はここ数日でアリシアはクロノをからかうことを覚えたのであった。

基本的にアリシアとフェイトは二人とも部屋で過ごすか、もしくはリンディとエイミィそしてクロノと過ごすかのどちらかであったのだが、そんな中でアリシアはリンディとエイミィそしてクロノとだいぶうちとけて色々な話をするようになったのだが、ある時アリシアはリンディとエイミィに教わったのだ。

クロノはからかうと面白いと。

そんなことを言われてはやらすにはいられないだろうと思ったアリシアである。

元々彼女はいたずら好きなのだ。

そして実際にやってみたら見事にアリシアの琴線に触れてしまい、それからことあるごとにアリシアはクロノをからかうのであった。

「……………おい。何が僕より一歩リードなんだ」

そしてクロノのほうも一々反応などせず受け流せば良いのだつい返事をしてしまう為に、こうしてアリシアにからかわれる結果となったのだ。

「だって……………貴方友達居ないでしょ？」

「僕にだって友達ぐらい居るさー！」

「へえ……………それは本当なの？　ならその友達の名前此処で言えるかしら」

「あ……………それは私も気になるね。私たちの知っている人かい？」

アリシアは完全にからかいモードで。アルフは割と天然な感じで訪ねている。

そしてそんな二人の視線を受け今更引っ込みがつかなくなったのかクロノは絞り出すように声を出したのであった。

「……………エイミィだ」

「おお！ 聞いた聞いたアルフ？ エイミィだって！」

「聞いたよアリシア。そうか、だからクロノとエイミィと良く一緒に居るんだね」

そしてクロノの答えを聞いたアルフとアリシアはキャツキャと笑い合っ。

そんな二人をこいつら本当にさっき友達になったばかりかよと聞いた気にジト目で睨んだ後にガツクリと肩を落とした。

そしてそんなクロノをフェレット状態のクロノがぼんぽんと肩を叩き慰めるのであった。

さて四人がそうやって戯れていた頃フェイトとなのはのほうも一段落がついたようである。

そしてそんな二人を見計らいそろそろ時間であることをクロノが伝える為腰を上げようとした。

けれどそれを見たアリシアがクロノのほうを向き声をかけた。

「あ！ クロノもう少しだけ時間良いかな？」

「ああ…………それは構わないがどうしてだ？」

「私もなのはに挨拶したいのよ。ダメかな？」

「そついうことなら構わないさ。ただ余り時間もないから手短にな」

「ええ！　ありがとうクロノ」

「あ……ああ……」

そうしてアリシアはクロノに笑みを浮かべてお礼を言いうとすぐに二人の元へ歩いていった。

けれどクロノのほうはまたもやあの笑みにやられて顔を赤らめてしまったのだった。

やはりあの笑顔は卑怯だと思っクロノ。

普段は大人びているくせにこちらへと向ける笑顔は心から笑みなのだ。

そしてアリシアはフェイトと同じで間違いなく美少女である。

そんな子からあれほど可愛らしく笑みを浮かべられ赤面しない男など居ないと心の中で意味も無く弁明するクロノであった。

そしてそんなクロノの様子を見て隣に居たユーノが一言。

「なあクロノ……君ってロリコン？」

「……うるさいぞフェレット」

そんな後ろでされているやりとりなど気にせずアリシアはフェイトとなのはの元へと歩いていき声をかけていた。

「ごめんさい。二人の邪魔をするわけではないけれど、私もなのはさ」と話してみたいのだけれど良いかしら？」

普段よりも上品な雰囲気でありシアは二人へと話しかける。

そしてそんなアリシアに対して少しだけ焦った様子でなのはは返事をするのだった。

「あ、はい！　大丈夫ですっ！」

「そう。ありがとございませす。では改めてあいさつ致しますわ。私はアリシア・テスタロッサ。そこに居るフェイトの姉です。よければアリシアとお呼びください」

「え、えと。私は高町なのはって言います。フェイトちゃんの友達で、よければなのはって呼んでください」

アリシアは確かにフェイトより小柄なのだが、それでもそこから醸し出される雰囲気にもまれてしまいなのはは緊張しているかのよう
に自己紹介を行った。

「もう……お姉ちゃん。わざとそんな雰囲気であいさつしてるでしょ」

そしてそれを横から見ていたやや拗ねたよう感じでアリシアへ声をかけた。

最近アリシアが他人をからかい始めていることを知っているフェイトは注意するようにつづのだった。

「あら……私の貴方の姉よ。お友達にきちんと挨拶しないといけないでしょっ」

「なのははそんなこと気にしないよー」

そしてそれでも止めないアリシアに今度は少しだけ怒ったような声をフェイトはだした。

「ふふ……」
「めんねさいフェイト。別にからかつつもりはなかったのよ？
でもフェイトが嬉しそうだったから私も少しだけはしゃいじゃった。なのはもめんねっ」

そんなフェイトの雰囲気についてアイリアは折れ先ほどまでの雰囲気気をひっこめ和らかな声で今度は話し始めた。

「むっ……お姉ちゃんのばか……」

フェイトはまだ私怒ってますと言った口調であるが、アリシアが優しく撫でてやるとすぐにへちゃっとした顔になるのであった。

「じゃはは。ちょっとびっくりしたけどフェイトちゃんと仲が良さそうで本当に良かったの。フェイトちゃんのことこれからもよろしく願います」

「それはもちろんよ。なのは」

「あの……それと……良かったらアリシアちゃんって呼んでいいですか？」

そう言うなのはの提案にアリシアは少しだけ驚いた顔をした後に優しく笑って快諾の声をだす。

「ふふ……そう呼ばれるのは初めてだからどこかこそばゆいわ。でも貴方にそう呼ばれるのは何だか嬉しいわね。つまり私のことも友達だと思ってくれてると言いつつとても良いのかしらっ」

「もちろんだよアリシアちゃん……」

「ありがとうなのは。これからよろしくね」

そしてアリシアとなのはお互いに握手を行った。

共に名前を呼びあい笑みを浮かべながら。

その後も三人は短い時間ながらお互いのことを話し合った。

そうしてこの青い空の下に三人の少女の笑い声が響いたのであつた。